

天晴會發行 ■ 大正三年度 ■

天晴會講演演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢
本文約八百頁
總クローズ上製美本
日蓮上人御尊像及
講演會寫真入り
送(内)地拾貳錢
料(朝鮮滿洲臺灣)四拾錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし
直ちに一本を購みて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

▲思想上の羅針大教書なり 一刻も早く之を讀んで自己の思想生活の充實を期せよ

- 發賣所 三 秀 舍
東京市神田區 美土代町二、一
電話本局二〇七九番三三八四番
接替口座二五七四七番
- 發賣所 三 上 徹
東京市小石川區 白山前町十七

日蓮主義の將來

大僧正 本多 日生

日蓮門下統合事業

自己及社會の開顯

三上 義徹

自信の權威

社 論

心 古定 不新

日經上人三百遠年記念序事

内藤 日郎

日記より

白山 迂人

統一

號二十四百二第

號 月 四

國産的宗教は何?

柴田 一能

大正三年度 四月十五日發行(毎月一、十五、三十日發行)

天晴會發行 大正三年度

天晴會講演演録 第三輯

定價金壹圓五拾錢

本文約八百頁

總クローヌ上製美本

日蓮上人御尊像及

講演會寫真入り

送内 朝鮮滿洲臺灣 地拾貳錢

萬古の偉聖日蓮の絶叫したる抱負識見は凜乎として人心激勵の活力を有す現代人は須らく日蓮の如き精力と意氣とを養はざる可らず人生優勝の地位は日蓮の大氣宇に感孚し得て眞に徹底的なりと云ふべし人間の全生活を無限に發展せんとする現代人は先づ必ず本書を讀むべし本書は日蓮魂に依て靈化せられたる名士の内的生活の公開なり内容の如何に豊富なるかは一讀して之を知るを得べし
直ちに一本を購ふて其の身心の莊嚴に努めよ身心の莊嚴と向上とは人生の重大問題なり此の大問題の解決指導は正しく本書内容の特色として紹介するを幸榮とする所速かに本書を讀め

内容
■ 姉崎文學博士。本多大僧正。小原陸軍少將。松森權僧正。笑作文學博士。
■ 脇田大僧正。山田法學博士。柴田慶大教授。井村權僧正。小林文學士。
■ 石橋中將。笹川文學士。實博。箕作博士。山根僧正。

發賣所

東京市神田區
美土代町二、一
東京市小石川區
白山前町十七

三三

上

秀義
發賣所
東京市神田區
美土代町二、一
東京市小石川區
白山前町十七

自 信 の 威 權

自己を偽るなかれ自らを信ぜよ、他を誣めるなかれ自己を省みよ、先づ自らを信じ他を信ぜよ、自らを信ぜずしてその生存欲のため他を傷けなば、是れやがて自己の獨立を危ふするもの也、他の獨立を尊重せよ、而らば自己の保存を保障し得べし、人は強烈なる自信を要す、自信なくして徒らに自己の擴大を望むは小人なり、小人輩は何つの日にか必ず亡びん、亡ぶるを知つて改めざるは甚だ愚也、活きよ、常に深く内に省み、自信を健全なる大道に求めよ、而して自信を遂行するに當り敢て左右を顧みるなかれ、情事の纏綿を楯として所信を執行し得ずんば、未だ徹底的自覺に到達せざるもの也、吾等の前途に自然の壓迫と個々の抵抗戦は斷えず烈しく行はるゝも、襲ひ來る幾多の曲折は自己力量の試金石に過ぎず、堂々たる正義的自信の前には波瀾曲折何するものぞ、自信の存する所に耐忍あり靜察あり勇氣あり、一忍以て百勇を支ふべく一靜以て百動を制すべし、自信は無限進行の力なり人生最後の優勝者なり、自信は一切の問題を解決し、生の前途を開拓するの權威を有す、聖日蓮の一代における奮闘の芳躅を觀よ、正しく強烈なる自信決行の活歴史にあらずや、來り覺めよ、爾自身の復活の爲に聖日蓮の活力に感孚し信伏せよ、斯くて爾の思想を鍊り堅實なる自信を生み、人生本來の面目を活現せよ。(白君)

日蓮主義の將來

大僧正 本 多 日 生

法華經は必ず流布す

日蓮主義の將來は如何なるであらうかと云ふ事は、之を二通りに觀察を下す事が出来やうと思ふ、夫は日蓮主義の教の精神から申しますならば、誠に完全なる教義でありますから次第に世の中に光輝を増して行くべき筈のものである、又經文御書の豫言に依りましても、此の法華經は闍浮提の中に廣宣流布すべきものであると云ふことは詳しく説かれてある、日蓮上人の御妙判に

「身は輕ければ人は打はり惡むとも法は重ければ必ず廣まるべし」

と仰せられて居る、如何に反對を受け迫害を被つても此の教が正しいものであるから必ず盛になるものとありと明言せられたのである、又

「日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は末法萬年の外未來迄流るべし」

と仰せられ、廣宣流布の事業は盡未來を通じて興隆すること疑なしと云ふことを述べられてある、而して佛敎は世界の宗教の中に於て最も秀でて居ると云ふ事は無論であります、世界の道德、學問、思想の中に於て、非常に廣い範圍に深い意味を持つて居るものであります、故に人生に文明の繼續する限り此の佛の教が派びぬと云ふ事は論ずる迄もない事である、又佛の教

の中に於ては法華經は最も尊い御經で、一切經藏を統御し諸經中の大王と稱せらるゝ教でありますから、佛敎が人心を支配し世人の信仰が持續せらるゝ以上、必ず次第に枝葉を去つて其の根本たる法華經に向つて來ると云ふことも更に疑ないと思ひます、尙從來法華經の解釋を試みた人は澤山ありますが、最も良く法華經を解釋したものは、天台妙樂傳敎、それから日蓮上人であります、それ故に法華經の眞意義を覺るには日蓮上人の御示教に従ふべきものであると云ふ事は火を踏むより明かな事であり、世には以上の道理が良く分らぬ人が多いのでありますが、それは今迄の狹隘固陋なる盲目滅法にやつて來た人達ばかりであります、事物を辨別する智能が發達しますれば、何人にも世界を大觀して佛敎が一番立派な教である、そうして法華經と云ふものは天台が先づ解釋したが、更に日蓮上人がより深くより立派にしたと云ふ理窟を諱する事はさして難しい事ではなからうと思ひます、若し今後段々世の中が野蠻になり宗教を輕んじ、思想界が頹敗し

て行くものとするれば、法華經が地に墜ちるかも知れませぬが、人類の文明は次第に向上し思想界は益々進化して、人生に宗教の必要なる事が愈々痛切に感ぜらるる様になりますれば、自然日蓮主義と云ふものは隆盛に赴かざるを得ない次第であります、樂觀致しませれば放つて置いても人類の文明其のものゝ方から進んで來て自ら日蓮主義を迎へるやうになる、草木は春が廻り來ればほつたらかして置いても花が咲く、今は日蓮主義法華經主義を弘むる上に於ても冬の狀況であるが、必や一陽來復して法華の花は滿開の時があると思ふ、上人は

「日本國一時に信ずる時あるべし」

と仰せられてある、此の時機が廻り來れば、日本人全部は擧つて、日蓮主義に歸すると云ふことを豫言せられてあるからして、さう云ふ方から考へますれば、誠に氣樂な事であり、宗教家は寝て居つても段々日本人が勉強し學問も進み、宗教に注意を拂つて眞理を探究した結果、此の日蓮主義が宜いと云ふ事が分つ

て一同に歸依する時がある譯でありませぬ、兎に角以上は第一の觀察即ち樂觀的觀察でありませぬが、果して吾人は斯る時機の到來のみを夢見て袖手傍觀して居て宜いものでありませうか。

法の興廢は人に存す

以上の如き理論も我々は決して信じない譯ではありませぬが、他の一方から考へますと云ふと、一體此の宗教と云ふものは如何に完全でありませぬ、宗教は人を離れて存して居るものでない、世には佛教は御經其ものであるかのやうに考へて居る人もあるが、それは大なる誤謬である、御經の教義と人間とが切れて居るならば佛教は亡びるのである、佛教が存して居ると云ふことは人間の精神の上に存しなければならぬ、若し宗教が經典や文字だけで宜いと云ふならば、日蓮上人は其の教義をチャンと御書き示されてあつて、それは上人自ら書かれたのであるから間違も何もあらう筈がない故、それだけで宜いと云ふことになる、弘まる

居るとか云ふことになる、間違つた事を多くの人へ傳へ弘むる結果になる、そこで、西洋でも東洋でも直接に宗教に従ふ者、即ち耶穌教で言へば宣教師、佛教で言へば僧侶が非常に大切な關係を持つて居るものである、佛法の三寶の中に、佛法僧と申して、佛と佛の教とそれを傳へる僧侶とが非常に尊いものであると説いてある、然るに茲に大に悲觀し且落膽しなければならぬ事があると云ふのは、此の日蓮主義を世人に紹介する所の僧侶でなくとも、専門に此の教を傳へて行く所の仲介者と云ふものの中に、果して十分の人があつて、此の將來種々の競争の激烈なる世の中に立つて行きて得るかどうかと云ふことであります、思想界の事に就ても基督教中には中々基督教に熱中してやつて居る人がある、假令基督教は佛教より低いものであるとしましても、其の熱心努力と云ふものは非常に強烈なものであります、又宗教反對の側に立つ科學の立場に居る人々は科學に依つて人間の文明に貢献せんと努力して居る、或は道德の立場に於て熱心に此の思想界に

の弘まらぬのと云ふ議論も要らない、法華經もあるし御妙判もチャンと存して居るから何も心配するに及ばないと云ふことになるものである。併し乍ら宗教の本義は、其の御經と人と精神とがどう云ふ風に引付いて居るかどう云ふ風に働いて居るか云ふことが問題である、宗教の問題は教の問題であると同時に其の教と人との間に結び付いて居る狀況が實際問題である、人の心の上に如何に傳はつて居るか、如何に働いて居るか云ふことが問題であります、而して其の教に専門に従事して居る人が、教を弘むるに就いて第一に大切な人でありませぬ、世人は、其の教を弘むる人傳へる人を通じて教に接するのであるから、宗教に取つて最も肝要なものは教を宣傳する人でありませぬ、中には自分で研究して宗教を知る人もあるけれども、併し教と云ふものは中々玄妙なもので「習はぬ經は讀めぬ」と云ふ譯で自分だけでは巧く行かぬ、矢張り専門に研究しそれに熱中して居る人の紹介に依つて宗教に接觸するのである、従つて其の紹介者が腐敗するとか間違つて

盡さんと活動して居る人があるし、其他政治上經濟上等社會全般の方面に活躍して居る人物がある、何れの方面を見ても中々力を入れて働いて居る人士に乏しくないことを知るのではありません、尙基督教に於ては近頃大舉傳道を試みて全國の教會が各派多岐に分れて居つても、總てが一致團結して非基督教と基督教との戦争を開いて各地に大奮闘をやつて居る、又教育者は宗教を忘れて居るとの非難を受けて居るが、國民道德の立場から之を普及させなければならぬと云ふことに努力して居ると云ふ風に、中々多勢の人々が一生懸命にやつて居る、其他實業の方面を言へば、工業にまれ商業にまれ非常に骨を折つて居る、學問の方に在つても科學の研究に就いては醫學であらうが工學であらうが、様々な研究の方面に非常に立派な事業に従つて居る、日本人としては比較的出來の良い質の良い所の人間が夫々さう云ふことを一生懸命にやつて居る、斯の如く各方面とも優秀なる人物豊富なる資金完全なる組織があつて、そして系統的組織的に且つ一生懸命に其の事

業の進歩發達に力を注いで居る、諷つて我が日蓮主義は如何、此の日蓮主義の精神を普及宣傳せんが爲に養成せられつつある者、又は其の事に従事して居る所の人間を考へれば、中には相當に偉い人物もあるし、又今日に於ては二百や三百人の者はせつせと眞面目に學問を修めて居るけれども、世の中の他の總ての事業の中に立ち交つて十分奮闘して勝利を占め得るだけの組立てになつて居るや否やと云ふことを考へますと云ふと憂慮に堪へぬ點が多いのであります、佛教諸宗の中に於ても今日の日蓮宗は、一等國の狀態ではないやうに思はれます、一等國と云ふのも可笑しいが兎に角今日の佛教諸宗の中で勢力のある大きな宗旨としては、先づ眞宗あり淨土宗あり禪宗あり眞言宗ありと云ふ譯であります、天台宗などは二等宗のやうな有様であります、日蓮宗は天台に比べて寺の数は少いかどうかと云ふ位で、二等宗の中一二位を占むべきものであるけれども、眞宗、淨土、禪宗、眞言宗等の諸宗に比ぶれば、寺院の勢力に於ても經濟力に於ても將又人物養成

の機關に於ても總て劣つて居るのであります、さう云ふ實際問題から考へて見ますと云ふと、日蓮主義の將來と云ふものは中々容易に樂觀することは出来ませぬ昔から「法獨り弘まらず之を弘むる人に在り」と云ふことがありますが、是は萬古を通じて變らざる金言であると思ひます、法は如何程立派なものであつても法が獨りて世の中に弘まつて行くものでない、即ち之を弘めて盛にするものは人に存すると云ふことであります、又「大教の隆夷は人に存す」と云ふ言葉がある、隆とは教が盛になり高くなる事、夷とは平と云ふことで、高くなつたものが平になることは衰退に傾くことを云ふものである、即ち隆夷とは興廢と云ふことである、詰り教の興廢と云ふことは人に存する、教其ものがどれ程良くても、之を宣傳する人が良くなかつたならば教は社會から勢力を失ふのである、此の點を考へれば今日の日蓮主義はどうも餘り安心が出来ないやうに思はれる、法華經は如何に立派な經典であつても是が後代に傳はるや否やと云ふことは矢張り人に存する

のである、されば良き宣傳者を得なければ法華經は弘まらぬものであります。

法華經の活ける解釋

而して法華經を護持し之を弘通させるのは通常の菩薩ではいけない、述化の菩薩では駄目である、何となれば、數へきれぬ法難に遭ひ、迫害を受け、反對を被りて到底述化の菩薩では堪へられぬからである、そこで本化の菩薩を呼出さなければならぬ、本化の菩薩の力てなければ法を弘むることが出来ないといふ位に教を宣傳する任務に當る者を良く注意して選ばなければならぬのである、是等の事に就いては法華經の經文に詳しく説かれてあります、神力品に於て本化上行が法華經弘通を如來より付屬されて居ります、さうして種々の菩薩は法華經の爲めに力を盡すことが説かれてあります、藥王品に於ては藥王菩薩は法華經の爲めに其の身を焼いて盡して居る、此の身を焼くと云ふことは言ふ迄もなく法に對する熱心を表はすもので、假令

身は燒き盡されても、又身を粉に砕いても、教への爲め法の爲め、努めて已まないと云ふ強烈なる精神こそ眞に法に仕ふる所以である、是れが本統の勇氣である、此の命懸けてやると云ふ精神氣魄なくば教への爲めに眞正の活動を爲すことは出来ぬ、次に東の方の妙音菩薩がある、妙音菩薩は三世四身に身を變じ辟支佛の身、聲聞の身、梵王の身等と爲つて法華經の爲めに盡すのであるが、此の精神は三世四身に身を變ずる位では未だ足りない、千變萬化隨機應變時に依り處に應じてあらゆる機會を利用して法華經の爲めに働くべきことを教へられたのである、袈裟法衣を身に着けて居る時ばかりでない半天を着て居つても羽織を着て居つても、其階級の如何を問はず、何人でも常に無限の活動を爲し法華經の爲め努めいそしむ必要がある、言語から座作進退の上から様々に三世四身に變化して迄も、何でもやらうと云ふのである、唯座はつた座はつたさうではいけない、座はつても起つても寝ても覺めても總ての場合を通じて法華經の爲め活動し

なければならぬのである、又西の方には觀音菩薩が居つて三十三身を備へて居る、さうして普門示現と云ふことを爲す、普門とは觀世音菩薩はよく妙法實相の真理を以て普く一切衆生を扶くる門としての示現化導を爲すことを言ふのであります、即ち觀音菩薩普門品と云ふものは、普く法の門を開いて西からも東からも隔から隔迄到らぬ限なく門を開放して、教に導くことを説いたものでありまして、唯口先ばかりで何時も「普門品普門品」と稱して居るだけは一つも門は開きはない、此の御經の精神と云ふものは決してさう云ふものではない、何をやつても普く人々が此の門の中へ入つて眞の教に接するやうにしたいと云ふことである、さうして法華經を世に弘むるに就ては天下の何者をも憚ることはない、縱令悪い奴がやつて來ても尙安心して法華經の爲に活動せしめやうと云ふ爲に、勇施菩薩と云ふやうな非常に強い何者にも打勝つことが出来る菩薩を法華經に付けてある、それから毘婆沙門天王持國天王十羅刹女鬼子母と云ふやうな強いのが澤山居る、

さうして、腕力を以ても法華經を保護しやうと云ふのである、我が日蓮主義を奉ずる者には此の強い信念がなければならぬ、唯だ御經を讀誦するだけの爲に法華經は出來て居らぬ、勇施菩薩は法華經の爲に奮闘する者の勇氣を鼓舞激勵して居るのであります、それから妙莊嚴王本事品第二十七に至つては教へに従事する者は名譽とか權勢とか云ふものを理想としてはいけないことを説いて居る、どうしても法の爲に戦ふ者は不利に陥る、さうして迫害を甘受し、犧牲の地位に立たなければならぬ、物質的慾望を起さないで活動しなければならぬ、權力を望み貴族富豪を夢み、此世の生活の満足を願ふては眞に法華經の爲に働くことは出來ぬ質素な生活状態に甘んじ乍らも尙且つ教の爲め身を忘れて盡すと云ふやうでなければならぬ、どうも斯う云ふ生活では詰らぬから、富貴の身分になつてあらゆる榮耀榮華を盡して見たいものなどと邪念を起す者に對して、妙莊嚴王本事品は是等の生活の快樂に心を奪はれてはいけない、世の權勢や名譽は度外に置いて

法華經の爲めに盡さなければならぬと教へて居る、又勸發品の法華經の教は最も大切であるから普賢菩薩は神通力を以て法華經と法華經を信ずる人を守護しやうと云ふことを教へられて居る、末法濁惡の世の中に此の經典を受持するものを守護し苦患を除かしめやう、法華經を讀誦する時普賢菩薩は六牙の白象に變じ、身を現じて人の信心を慰めやう、法華經の教には之を宣傳する人が最も大切であるから、其人の元氣を激勵致さうと云ふことが勸發品の意味であります。

戒心を要する諸點

上に述べました法華經の意義を良く理解して活動せるものが、日蓮主義の僧侶の中に果して幾人ありませうかさう云ふ考の僧侶を作るべきことは檀家信徒に於ても大に考へなければならぬ所である、我が日蓮宗にはさう云ふ立派な精神が續いて來たのでありまして、殊に足利時代などは中々良かったが、足利の末業信長の天文頃より漸く變調を來すやうになつた更に豊臣時

代に入つては不受不施派の日興が權門の壓迫を受くるやうになり、續いて家康時代に慶長宗論の法難があつた、斯て徳川幕府の三百年間に於ては日蓮宗は骨抜きにされて仕舞ひ、少し出來さうな僧侶があると直ぐ島流しにしたり、種々の壓制迫害を加へて引抜いて仕舞ふと云ふ政策を執つた、結局粕のやうな人間ばかり残る譯である、又良い人間を引抜いて仕舞ふと自然後に残つた悪い奴が勢力を得て跋扈するやうになり、大根知ならば間引をすると他の大根が大きく生育すると云ふ良い結果になるけれども、人間と云ふ者は一人の立派な人物が出ると云ふと、それに感化誘導されて澤山の人物が輩出するものである、例へば桶公が一人現はれると其の忠節に導かれて彼方からも此方からも勤王の士が續出するものであります、悪い奴が出て勢力を得ますると其の勢に連れて更に多くの悪い人間を生ずるものであります、徳川時代に於ては餘程澤山間引かれたやうである、兎に角名前の分つて居る者だけでも何十人と云ふ立派な人が抜かれて居るのであります

従つて其の後へ殘つて居たものは概して悪いものばかりであつた譯である、第一學校の教育の方法が宜くない、一切日蓮上人の書かれた書物を讀むことが出来ないやうになつて居た、されば二三十年日蓮宗の檀林に居つても上人の御書が一つも讀めないといふ有様でありましたから、自然日蓮主義の眞意義を忘却し、其の間に教風は頹敗して様々な弊風を生じ混亂に陥つたのであります、併し是も其の時の機運で已むを得なかつた次第であります、されど其壓迫の手は今日既に取除かれてある、風荒む徳川の冬は去つて春風暖い彌生となつたから法華の花は開かねばならぬ、明治維新になつて大に信教の自由の下に日蓮主義は勃興しなければならぬ時機に際會して居るのであります、過去三百年間壓迫せられ來りし爲め其の間に幾多の弊害が醸されて來て居るから、今日は其の誤れる精神を改め、日蓮上人の教の眞の本義に戻つてやらなければならぬのであります、然るに現今の各教團を見渡すに、徳川時代より其儘引續き今日迄命脈を保ち來つたものが勢力

を得て居つて、新たに頭を擡げて教の爲に活動せんとする者があれば「飛んでもない奴が出て來た」と言つて群鴉が蠢を窺めるやうなことをするのであります、又檀家信徒の大部分の者も何の考へもなく此の鴉の尻に附いてガアガア騒いで居ると云ふ實に情ない有様であります、大部分は實際それであり、今日の日蓮主義の状況と云ふものは、僧侶も信徒も是迄三百年間骨抜にされて來た日蓮主義だか、又は大に發展せんとする所の日蓮上人の本統の教を傳へんとする正しき日蓮主義だか、どつちだか分らないので宛て搗き損ねた餅のやうなものであります、餅でもなければ御飯でもない、非常に堅いやうな所があるかと思へば、又崩れかゝつた所などは粥の煮返へし見たいなものである、何であるか分らない、堅いやうな柔かいやうな勢のあるやうなへこたれたやうな、頭の大さいやうな小さいやうな、何ものとも分らないやうなものが今日の日蓮主義の狀態である、蝙蝠は鳥でもなければ獸でもない譯の分らないものであるが、それでも羽根があつて空を

飛ぶ一個の動物であると云ふことが分る、今日の日蓮主義各教團は蝙蝠よりも尙甚だしい譯の分らない怪物であります、斯う云ふ有様であるのに之を自覺して居ない、目が覺めて居ない、少々は覺めて居る人があるかも知れないけれども、全體の何百萬の日蓮主義の中から申したならば誠に少數なものであります、決して大多數は覺醒して居らない、依然として惰眠を貪つて居るのである、此の惰眠の状態が改められない限りに於て日蓮主義の將來と云ふものは悲觀すべきものであります、今後次第に其の勢力を失墜して行きはせぬかと危ぶまれるのであります、假令一少部分は覺醒して居ても、全體が腐敗して居つては中々是が改善は難事であらうと思ひます、然らば日蓮主義の將來は全く悲觀すべきものであるかどうかと云ふに、私は先づ悲觀すべきが眞理であるまいかと思ふ、今日の日蓮主義の状況は恰も支那の如し、支那人は偉さうに自分の國を中國であるとか中華であるとか、或は君子聖賢の國だと言つて誇り、他國を夷狄蠻戎と輕蔑して居る間に段々

國土を削られて次第に亡びに近きつゝある、其の空威張りは日蓮主義の空威張りと同じく似て居る、兩者は結局滅亡に歸するのであるまいか、先づ目下の處では餘程注意をして新しい一つの刺激を以て迷夢を打破する處の一つの覺醒運動を要するのであります、それも自然の刺激では中々覺める筈がないから、特別な人々の大々的の刺激を與へなければならぬ、少くとも爆彈を投ずるか、地雷火を爆發させるか、其の爆彈を彼方へも此方へも投下したならば覺める、私の日蓮主義廓正に對する確信は是であります、それでさう云ふ運動を起す人があるかどうかと云ふことが問題であります、之は今日此處で明言を憚ることであるけれども、さう云ふことを考へて居る者は多少あるやうに思ひます、是が事實となつて彼方此方で爆彈が破裂することになつたならば幾らか目が覺めやうと思ふ、さう云ふ一種の覺醒運動が極く理想あり、信念あり、而して勇氣の強い人に依つて行はれ、之が出發點とならなければ本統に夢が覺めまいと思ひます。(次第に完結す)

日蓮門下統合事業

大正三年十一月八日、聖祖鶴林の靈地池上本門寺に於て、日宗七教團の管長及代表者は、敬虔なる至誠を以て神聖なる會議を開き、分裂せる門下の統合を企ててより、爾來各派代表の交渉委員は、各方面に亘りて細密なる審査を遂げたれば、大正四年三月十七日の會合に於て規約を制定し、從來の交渉事務所を解散して新たに統合事務所を設くるに至れり

統合規約

- 第一條 聖祖門下七教團は教判の本旨に従ひ統合歸一を實現せんことを期す
- 第二條 教義の統合に關しては各教團互に至誠正義の存する處に遵ひ適當の解決を爲すものとす
- 第三條 前條の目的を達する爲め教義統合委員會を設置し其完全を期す

教義統合委員會の規定は別に之を定む

- 第四條 制度に關しては制度調査委員會を設置し統合し得べき事項より漸次之を協定せしむ
- 制度調査委員會の規定は別に之を定む
- 第五條 對外的布教に就ては最善の方法に依り七教團の間に聯絡一致の行動を取るものとす
- 第六條 聯絡布教に關しては毎年大講習會を開催し又大舉講演臨時講演等を実行す
- 但し聯絡布教に關する規定は別に之を定む
- 第七條 七教團の子弟を教育する爲め統合大學を設立す
- 第八條 前條の目的を達する爲め統合大學創立委員會を設置す
- 統合大學創立委員會の規定は別に之を定む

第九條 七教團統合に關する諸般の事務を處理する爲め統合事務所を東京市内に設置す

第十條 統合事務所に左の職員を置く

- 一、評議員 十四名
- 一、幹事 三名
- 一、會計 二名
- 一、書記 若干名

統合事務所の職制は別に之を定め其細則は評議員會に於て之を定む

統合事務所に臨時顧問若干名を置く

第十一條 統合に關する一切の經費は各教團の寺數に應じて各教團の宗務役所より統合事務所に納付するものとす

第十二條 經費豫算は評議員會の決議に依り之を定む

第十三條 會計に關する細則は評議員會に於て之を定む

第十四條 本規約は各教團全部の合意に依るに非れば變更加除することを得ず

第十五條 本規約變更の必要ある場合には三教團以上の同意を以て其修正を要求することを得

右の條々は、大正參年拾壹月八日池上に於ける聖祖門下七教團管長及代表者會の決議に基き我等交渉委員は各自其教團を代表して茲に之を審議協定し佛祖照覽の下に督て異議なき事を盟約し同文七通を作成して各教團に之を保有するもの也

附則第壹號

教義統合委員會規定

第一條 統合規約第三條に基き教義統合委員會を組織す

第二條 教義統合委員は七教團の交渉委員を以て之に充つ

但し其教團の都合に依り他の委員を選出し之に代ふること得

第三條 教義統合に關する方法其他諸般の事項は教義

統合委員の協議を以て之を定むるものとす

第四條 教義統合委員に於て決定したる教義信條は各

教團管長の承認を経て之を各教團の僧侶に布達するものとす

第五條 七教團管長及臨時顧問は教義統合委員会に列席して發言することを得

但し議決の數に加はるを得ず

第六條 七教團門下の僧俗は教義統合委員会に對し建言することを得

附則第貳號

制度調査委員会規定

第一條 統合規約第四條に基き制度調査委員会を組織す

第二條 制度調査委員は評議員を以て之に充つ

但し其教團の都合に依り他の委員を選出して之に代ふることを得

第三條 制度調査に關する方法其他諸般の事項は制度調査委員の協議を以て之を定むるものとす

第四條 制度調査委員会に於て決定したる事項は各教團管長の承認を経て之を實行す

第五條 七教團管長及臨時顧問は制度調査委員会に列席して發言することを得

但し議決の數に加はるを得ず

第六條 七教團門下の僧俗は制度調査委員会に對し建言することを得

附則第參號

聯絡布教規定

第一條 統合規約第六條に基き本規定を設く

第二條 各教團の布教適材者に必要の講習をなさしむる爲め毎年五月壹日より向ふ六拾日間東京市大講習會を開設す

但し時宜により評議員會の決議を以て期日を變更することを得

第三條 毎年適當の時期を以て全國樞要の地に於て大舉講演を開催し又臨時必要の場合には適當の地に大講演會を開く

第四條 聯絡布教に關する細則は評議員會に於て之を制定す

第五條 聯絡布教に關する事務は統合事務所に於て之を處理す

附則第四號

統合大學創立委員会規定

第一條 統合規約第八條に基き統合大學創立委員会を組織す

第二條 統合大學創立委員は交渉準備委員を以て之に充つ

第三條 統合大學創立委員は大學の創立設計位置の選定開校の時期學則の編制學科の配當其他諸般の事項を調査し協定するものとす

第四條 統合大學創立委員会に於て決定したる事項は更に評議員會の議に對し各教團管長の承認を経て之を實行す 以上

附則第五號

統合事務所職制

第一條 統合事務所職員の職制を定むること左の如し
一、評議員は統合實現に關する諸般の事項を審議

決定す

一、幹事は評議員會に於て決定したる事項の實行を司る

一、會計は統合事務に關する出納を司る
一、書記は文書記録を司る

第二條 評議員は七教團より各貳名を選出する者とす但し最初の評議員は交渉委員を以て之に充つ其教團の都合に依り他の委員を選出して之に代ふることを得

第三條 幹事及會計は評議員會に於て選出す
第四條 書記は幹事之を任用す

第五條 臨時顧問は交渉委員会協定を以て之を囑託す又評議員會に於て必要を認めたる時は議決に依り之を囑託することを得

補則

統合事務所は交渉委員会に於て之を定め統合事務所の成立と共に交渉事務所は之を解散す

▲日記より(昔が生活経過の断片)

白山迂人

×日一昨年六月滿二ヶ年の約束で、英國の某商會社に傭はれて相洋丸に乗つて居る實兄より手紙が届いた、手紙には何の用事も書いてないが、如何にも愉快なる生活を送つて居る意味が文字の上に活躍して居る就任以來内地の風土には一度も接せず、一二回ベルシヤとボンベ一の土を踏んだ丈で、休みなく熱い印度洋上の航海を續けて居るが、法華經講義や御遺文を日課の如く拜讀して、有力なる味方を得たかの様に感ぜられ、相洋丸の船員は西洋人と支那人が多く、日本人は高等船員四五名に過ぎないが、何れも海上生活の無味に耐えられざるためか交代になつたけれども、日蓮上人の雄大なる神祕の力を信じて忠實に職務遂行の場所に、必ず天祐加護の現はるゝこと、觀念し、南無妙法蓮華經と唱へながら規律のない支那人と生活を同じふして居るが、不愉快の念も起らないのみか、印度洋の

熱さも苦痛にならず、一律なる船内生活も寂寥を覺えない、信仰は偉大なる力である、信仰の靈火が消えないお蔭で、今の生活の航路を進んで行くことが出来る如何にも難有い幸福であるとの事である、曾て信仰を勧めたる能化者の予は、寧ろ兄の現在生活の事實が反て予を教訓するものあるかの如くに感ずる、何は兎もあれ、波濤萬里の船の上、斯かる信仰生活に在るを喜び、御佛の加護の宏大なるを感謝せずには居られない

×日一寺崎時事新報記者が神經興奮せりと云ふ某資産家の息子を伴れて來た、その息子は中學の五年生で、十錢文庫の哲學思想に中てられてか突拍子に思想が高調して居つて、自我が何うの他我が何うの人生の意義がなんど、さう云ふ問題に頭を悩まして居る、正しく思想上の昏睡状態に陥りて、煩悶憂惱何れに適歸してよいか分らない、予は真向より日蓮主義の人生觀を説いて、自我の實在發展と他我が實在活動とを論道する事三時間、中學生は能く分りましたと云つて喜んで歸つたが、而し中輪の無い思想に酔ひ新しいと云

ふ事に煽て上げられて苦んで居る學生は、さぞ多いことであらうと思はれる、この一人の學生は現代の文明病に犯されて居る大多数の思想状態を、正直に代表的告白をしたものではあるまいか、さすれば、思想家たるものは等青年の前途を指導するに全努力を盡さねばならぬ、今後の舞臺を經營すべき青年の頭腦を改造する事が、教育家の肩に擔ふ重い責ではあるまいか

×日二宇都宮安國會麥倉幹事より、四月四日の講演開催の案内文を認めて送れとの手紙が來た、同會は三四の居士が皆順正法の文を色讀して、其の資財と勞力とを提供して設けたるもの、予の深く敬意を表して居る會であるから、直ちに筆を把りて「近時物質の文明は著しく進み來り候へ共、而れども其文明病に冒されたる患者倍々多きを加へ、人心險惡の傾向あるは是れ識者の共に憂ふる所に有之候、本會が風教革新と人心向上の爲に聊か貢獻致度き熱望を以て生れたるは已に一年の昔にて候、爾來微力なる同志には候も全身心を捧げて此事に盡し、天下知名の精神家を聘して健

全なる思想の鼓吹に努め居り申候本會の事業及目的は一時の問題に驅られたる突發的運動には無之、人生及國家問題を徹底的に自覺せしめんとの希望に有之候へば、正しく永久無終の精神的事業なりと信ずる所に候本會は其基摸未だ大ならざるものに候へども、日蓮上人の論道せられたる公正なる主張に基き、大に發憤興起して思想革正運動の爲に努力せんことを誓願發心致居候、大方の諸賢、自己生存の意義、自己と國家と社會との關係、自己の無限發展の力、現代世界の大勢に處する自己の地位、自己修養上の健全なる道德及宗教の撰擇是等諸種の思想問題に思ひを致され候はゞ尤も健全なる立脚を得て各思想を調整し、其洗練し統一せる思想に遷りて自己の修養に努むるは、吾等が人生に處する第一義と存じ候、本會は是等思想上の問題を解決せんが爲に、大講演會を開催して諸賢が修養の資料に供したき微望に有之候、希はくば諸賢の爲國の爲道の爲奮て御來會被成降度此段御案内申上候」と書いて送つたが、這う云ふ眞面目で熱心な思想上の集會

が多くならなければ一國の風教を刷新することが出来ない、自から陣頭に立ち働いてこそ徹底的身請者である、彼の朽木の行學會や静岡の晴明會などは、日蓮主義の模範的團體であるが、各地にかゝる種健實なる會が生るゝ様に致したい、徒らに組織上の形式のみ大にして内容の貧弱なるは不可である

×日 本文化記者團の相談會を予の四疊半に開いた、五種妙行の文書傳道に力を注いで居る同志、何處か根性の曲つた凡骨とは異ふ所がある、各自の精神みな公開的である、人に言はせて置いて揚足でも取らうかと云ふやうな小人は一人も居ない、何れも菩薩的態度であるのが嬉しい、それ故に凡て問題は一言の下に要領を得る、けれど流石は巧於難問答の格で、別任立に當るべからざる氣焔を吐く、中には不飲酒戒を守る殊勝者も居るが、箸の方では二人前以上を食ひ盡してケロリとして居る健談家が多い、浪花節や臺詞では場末の寄席で眞打を張れる位の通人も居る、世には色々の會合があらうけれども、吾々同志の集まつた時の様に厭味

のない、さうして滑稽趣味と眞面目な至誠とを融節した集りはなからう、中には人の唸つて居る間に徳利を横にし馳走を整理するを以て、同志中の評判になつて居るものもある、さりとて無邪氣なる人々なるかな、飲み且つ食ひ終れば話しの眞最中に左様なら

×日 統合事務所より招待があつたので席末を汚した臨時顧問役たる山田博士矢野檢事佐藤少將清水先生臨田僧正と各雑誌記者、主人側には本多大僧正と足立佐野の兩僧正が控いて居る、統合事務が順調に進み來つた経過報告を詳細に聞いて、漸く不明了であつた真相を了解することが出來た、晚餐後懇談數時、最後に朝鮮通者の間に多毛無毛と云ふ珍説に花が咲いて、一同咲と笑ふ、面白ひ、一代の重鎮が、打寛ひての談話振何とも云へぬ温か味のある様に感じ入りた、踏途小島町から電車に乗り、白山上で佐藤少將と別れて歸る

國産的宗教とは何?

柴田一能

昨夏セラエゴオで奥國の皇儲がプリンチツプと云ふ名もなき一青年の爲に暗殺せられた事件、言はゞ螢火の様な些細な面も突發的の出來事が導火線となつて前代未聞の歐洲大動亂が持ち上がった、最後の勝利は言ふ迄もなく聯合軍側に歸すべしとは相手方の獨塊及び土耳其を除いた國民の萬口一齊に唱ふる所で、況してや日英同盟の義によつて既に青島の攻略を敢てした我日本は如きは猶更の事である、然るに二年越しの今日東西の形勢を觀望して居るのに、所謂武田上杉の川中島合戦の格で、一進一退、彼此互角、俄かに烏の雌雄を決すべからざる有様で、何時終極を告げるか一寸見當がつかぬ、前代未聞と云ふ時間上の形容詞は益々其

安當性を事實の上に證明されつゝある譯である、今回の大戦は歐洲の一局より始まり、漸々波紋を擴大して今日は最早世界的大戦となり、空間上に於ても亦前代未聞の大任掛となつて來たのである、従つて此の戰爭に依て受けたる我々の經驗——教訓を顧みても前代未聞の新しいものが數々ある、就中國産獎勵と云ふ叫びが物質界精神界の兩面に亘つて、津々浦々の隅にまで波及したことは忘れてはならぬ事である、

元來國産と云ふ熟語に附隨して居つた意味は高貴なる舶來品——外國産に對する内國産即ち和製品と云ふことで、和製は即ち粗製若くは模造の意味で、原品を

眞似た偽物、劣等品即ち安値品と云ふことであつたのである、成る程我國の文明史を振り返つて見ると、應神の朝に於ける儒教即ち支那文明の輸入を手始めとして、欽明朝の佛敎即ち印度文明の輸入と云ひ、近く徳川の末世より明治にかけての西洋文明の輸入と云ひ、日本の文明とは云ふが實に孰れも皆外國文明若しくは其模倣で、且に吳客を迎えて夕に越客を送る底の遊女的態度で、彼方に向けては色目を使い、此方に向けては諛を呈し前には握手を求め後には尻押しを哀願すると云ふ附甲斐ない有様で、史上の實際に照し来れば、我は常に受働的消極的で、思想界に於ける輸入超過は習ひ終に性となつて別段耻かしいとは思はず、寧ろ双手を揚げて歡迎又歡迎、日も惟れ足らざるの状態であつたのである、

極度の西洋崇拜若しくは心醉熱に對して國粹保存と云ふ様な事が叫ばれ、日本主義と云ふ様な聲も一時大に揚がつたこともないでは無かつたが、所謂是も一時彼も一時の反動的牽制運動位に過ぎなかつた、斯くて國

のは無論後の方の問題に付てゝある、思想上の國産獎勵と云ふ叫びは美しく耳にも響くし、眞に結構な事には相違ないが、之を裏面から眺めると輸入防止と云ふ事て即ち思想上の鎖國主義である、東西の交通の如くに開け、通信の機關の如くに完備した現代に於て絕對的輸入防止と言ふが如きは到底言ふべくして行はる可らざる事である、又行ふてはならぬ事である、國産獎勵は飽くまでも積極的の意味に解して日本特有の思想研究を獎勵し、日本人の(オリジナリティー)——獨創力を發揮すべく内部からも眞面目なる自覺心を喚起し、外部からも其機運を促進する様に努力すると云ふ意味に解して、在來の文明史上に日本的と云ふ形容詞を持つた文明を樹立せしめたのである、儒教の輸入ありてより已來二千年間の修養期は随分長いものである、日本化と云ふことは我國民性の一特色で儒教的支那文明にも、佛敎的印度文明にも、將た基督敎的西洋文明にも、單なる模倣や眞似に止まらずして相應に日本的に咀嚼し消化して、一種の色調を帯びしめた事

産物は物品たると思つたるとを問はず、頭から詰らぬもの價値の無いもの劣等なもの極込んで自から非常な侮辱を與へて居つたのである、この自分で自分に加へた(コンデッセンズ)——自屈自卑の精神は現に外國貿易の上に實現せられて、戦時の競争には大勝利を博しながら平時の競争即ち商工業の競争には何時でも大失敗を演ぜざるを得ない破目に陥つて居る、日本は一等國なり、東洋唯一の獨立國なりと口利つた如く言ふては居たが大戦破裂後の商工業界の慌て方は何うであつた、大きな事は兎に角として大多数の下層社會は爲に安い賣藥が飲めなくなり、更に大多数の子供達は氣の利いた玩具で遊ぶことが出来ないと云ふ悲劇を曝露したてはないか、小さい事で既に斯の如してある、何とミヂメな事ではないか、

國産獎勵論は斯くて朝野に勃興し來つたのである、自然の勢ひ、尤な次第と言はねばならぬ、從つて思想上の國産獎勵論に火の手が揚る様になつた事も順當の進み方であらう、私が茲て少々批評を試みんとする

は明了な事實で、何人も認むる所であるが、日本化は如何にしても日本化だけのものでは、日本の文明として世界に推し出すに足る底のものではないことも亦明了な事實である、果して然らば、外國は常に與へて日本は恒に受け手、彼は始終先生で我は永却弟子の分償を脱することは出来ぬかと言へば、何うも然りと断言する事は出来ぬ、長短相補ひ有無相通ずとは人文發達の原則で、類化應化の兩作用は即ち思想の向上進歩に缺くべからざるものである、二千年來常に受働的地位に在り弟子の禮を取りつゝ來つたのは、將來に於て師匠の權威に立ち能動の地歩を占めむが爲であると覺悟せねばならぬ、大ひに學んだのは他日大に教へんが爲であるとの信念を失ふてはならぬ、眞の獨立國は常に政治上實業上軍事上のみに止まらず、思想上に於ても自主獨立の權威と實質とを具備して居なくてはならぬ、這回の大戦と同時に我邦の思想界は涸渇せりと風評せられた所を以て見ると、少くとも思想界に於ける我邦の獨立は無かつた譯である、此にお氣がつかれ

ての國產獎勵論は特に意義深きものと言はねばならぬ
 聞くが如くんば彼のガラスの如きも戦争以來獨逸よ
 りの輸入が杜絶した爲に、所謂國產獎勵の聲の一生懸
 命になつて研究し鍛錬した結果未だ半歳ならざるに殆
 んど外品と異らざる迄の上等品を製造することが出来
 て、一時に暴騰したガラスの價格は漸次に順當に復し
 たと云ふ事である尤も此間九州にある日本第一のガラ
 ス製造所が火災に罹つた爲に現品に不足を來し爲に又
 々高價に上りつゝあるとの話ではあるが、兎に角本氣
 にさへなれば日本は決して外國に勝るとも劣りはせぬ
 かと云ふ證據は此一事でも分ると思ふ、更に研究心を
 策勵し費用を吝まらず相當の保護指導を與へたならば、
 精巧なる美術品以外大規模の製造工藝の方面に於ても
 優に日本の獨創の能力を發揮し得るの可能を信ずるも
 のである、

論者或は言はん、开は物質界實業界の話にして思想
 界精神界に於ては到底同日の論にあらざらんと、成程
 一應は尤である、此後我々日本國民が新文明の旗幟

合、立正安國の統一主義は、社會の進歩人類の向上と
 共に、益其光彩を發揮すべき運命を有するもので、
 未だ萬年の闇を照破する妙法五字の光明は、一切文明
 の綜合であり歸結であらねばならぬ、國產的宗教とは
 即ち此の日蓮主義に外ならぬ、日本國民は此の如き世
 界に比類なき精神界の大國產を所有しつゝ、顧みなかつ
 たのである、當然誇るに足るべき國寶を蕪芥に委して
 知らずに居つたと云ふことは、お國自慢では世界に向
 つて一步をも譲らぬ日本國民として不思議な矛盾と云
 はねばならぬ、如何に國產獎勵と言つても精神界の事
 は泥棒を見て繩をなふ様には行くものではない、手早
 い事には何處かに抜け目があつて缺點があるを免れない
 下手なものを出して赤恥を掻かうよりは、六百年來録
 りに練つた日蓮主義ならば何の造作もいらぬ唯之を國
 家的國民的に發表し實行すればよいのである、處で問
 題は、果して日蓮主義を純日本的即ち國產と云ふ銘を
 打つに足るか否かに止まるので、(イエス)か(ノー)か
 の一言で萬事の決がつくのである、若し私共が(イエ

ス)と答へたならば、其が正答であつても人は我田引
 水と聽き做すであらう、他宗他門の者ならば外交的お
 世辭に過ぎぬと見るであらう一般俗人であるならば道
 徳や宗教やが分りもせぬ辯にと貶さるであらう、然ら
 ば一般に佛教からは敵と見られて居る基督教者からの
 返答を聞いて見たら何うか、是ならば先づ嚴正中立、
 否、敵としては寧ろ悪く言ふべき答であるから、之か
 ら(イエス)の答があれば誰でも正當であると許さねば
 なるまい、

を驕し、二千年來の負債を一時に皆済して、世界の耳
 目を驚動せしめん等の考は、壯快には相違ないが寧ろ
 誇大妄想で、とてもモノには成らぬであらう、誰でも
 言ひ相な事である、併し私等の考を以てすると、我々
 日本國民として日本の文明を創造し發揮するの能力あ
 り天職ありと自覺した以上、其文明なるもの性質は
 決して物質的科學的のものではなくして、寧ろ精神的
 思想的のものでなくてはならぬと確信する、思想的と
 云ふても哲學や文藝の方面ではなく道義及び信仰の方
 面に於てである、

然るに此方面に於ける日本の卓越性は、遠く未來を
 期するにあらずして近く過去及び現在の問題である、
 未成品ではなくして既成品なのである、悲ひ哉明治已
 降物質的科學的西洋文明に絶對信仰を捧げて、命まで
 もと打込んだ國民全體の妄信迷信の雲霧が事物の實相
 を看取するの明を蔽ふて自卑自屈に淪落して居つたの
 である、少くとも宗教的部面に於ける我日蓮主義——
 日本的道徳と日本的宗教とを打つて一九とせる法國冥

に成つた Representative Man of Japan 「代表的日本
 人」の中に我日蓮上人を批評して「日本人中で日蓮
 上人程の獨立獨歩の偉人は外には考へられぬ、然り
 上人は其獨創力と獨立性によつて一大佛教を日本
 的の宗教に仕立て上げたのであると、
 議論の當否は須らく措き國產獎勵の聲によつて攪破せ
 られたる各自の國民的自覺と、公平無私なる研究と批
 判とに依て解決せらるべきものである。

本化記者團擴張の議

日蓮主義啓蒙と共に法國冥合の機運は、刻一刻と迫り來れり、吾等筆を以て大法の宣傳に努力するもの、更に一段の奮闘を以て、惡魔の軍勢を目撃して猛烈なる突撃を爲さざる可らず、然り、法王軍の戰士は少數なるも、日蓮魂によつて鍛え上げられたる一騎當千の本化の佛子、臆病未練の振舞は微塵だも存ぜず、決死は已に吾等の胸に在り、天下の愚者は之を視るの明なからんも、佛天を嘉納して活動の力を與へ、吾徒の意氣信念壯烈を極む、而して吾等と主義を同ふする雜誌社は、全國を通じて二十有六あり、今回各社互に氣脈を通じて文書布教の爲に利便を圖り、異體同心以て大理想の實現に奮闘せんが爲、各社に對して加盟交渉中に屬す、本團の沿革及規約左の如し

▲沿革、日蓮主義宣傳の爲に起れる各雜誌社は、從來所屬教團を異にせるため全然氣脈を通ずるものなかり

しが、明治四十五年五月、有志相圖りて各社の懇和會を開きて相互の意思を融和し、各其目的遂行の爲團結すべきを約し、會名を日蓮門下雜誌記者會と定め、懇談の會合は法螺會と名けたり

▲經過、明治四十五年七月發會式を擧げ、神田和強學堂淺草統一閣日本橋常盤俱樂部に大講演會を開催して各社員責任講師たり、爾來毎月一回の公開講演及法螺會を開き、常に異體同心の心地に住して布教上の運動を實行し、且つ教學上の意見を一致せしむるに努め理論と實際とに於て分裂教團の陋習を打破して結合の機運及實現を期すべく運動を繼續しつゝありしが、新たに加盟の雜誌社もありければ大正二年十一月、會名を本化記者團と更め、一段の奮闘を以て初頭の目的實行のために盡せし事實は、既に各社發行の雜誌紙上に明かにして本團員の齊しく欣快とする所なり

▲向後の方針 近時日蓮門下七教團統合の議成り着々其進捗を見る是れ本團が四ヶ年以前より此の理想を以て實際に之を行ひ來りし問題なりとす而して本團は時代必然の要求に應じ、此際全國に發行せらるゝ二十六の日蓮主義雜誌社と互に氣脈を通じ、大に法王軍の奮闘を猛烈ならしめんと決意し、茲に本團加盟者の範圍を擴張せんとするもの也

- 第一條 本團は本化記者團と稱す
- 第二條 本團加盟者は日蓮主義宣傳を標榜する全國の雜誌社員を以て組織す
- 第三條 本團の目的は四海歸妙の大理想を體し専ら文書の權威を以て主義の發揚に努め人生及國家社會を啓導するにあり
- 第四條 本團は各自其天職を遂行するの外に左の事項を行ふ

- 第五條 本團の事務所は東京市に置く
- 第六條 本團加盟者は團員の紹介及幹事會に依りて決定する事
- 第七條 本團加盟者は一ヶ年金參圓の團費を提供する事
- 第八條 本團の經常費は團費を以て支辨し毎年十二月決算報告する事
- 第九條 本團に幹事五名を置き一切の事務を掌理す
- 第十條 本團員にして本團の體面を傷くる行爲ありと認めたるときは幹事會の決議に依り之を除名す
- 補 則
- 第十一條 本團に規定なき條件は隨時幹事會の決定に依りて處理するものとす

- (一) 毎月東京に講演會を開く
- (二) 毎年二回大會を開く
- (三) 適宜各地に出張講演會を開く

▲本化記者團事務所は當分の間
東京小石川白山前町十七番地に置く

佛教の中心

自己及
社會の開顯

三 上 義 徹

佛教の中心、古來より佛教研究の重大問題ではあるが、今なほ佛教の中心が思想の上に明確になつて居らぬ、従て佛教徒は如何なる中心に立ち如何なる理想を以て進むべきか、解つて居らぬであらう、中心理想が解らないで、何を目算けて運動して居るのであるか、其だ以て奇怪千萬の次第である、夫故に從來世人は佛教に對して、國家及人生を顧みない厭世思想であると斷案を下して居つたので、佛教自體の眞價は地に墜ちて、何等尊敬を拂ふものがない様な悲惨な有様である唯だ辛ふじて民間の低き階級に其餘勢を維持して居りまするが、稍や高き地位に在るものは中心が鮮明になつて居ぬから研究の針路を見出すに苦しんで居る、現

に世人は煩悶苦惱して心的欲求を充さんとして居るのではないか、然るに人類救済を第一目的として發生したる佛教其ものが、此の要求に應じて満足と與ふる事が出来ないとは、何たる不始末なる事でありましよう、佛教徒たる淨土宗眞宗禪宗其他の教團信徒よ、自己が多年養はれ來りたる其教義の内容を徹底的に詮索して果して現代人心に満足と向上とを與へ得るや否やを究盡することを要する、研究は頗る虚心坦懐にして情弊に囚はれてはならぬ、吾々の觀る所では、日蓮主義以外の宗教は、人類の全欲求を満足せしめて國家社會の進運を促がすに足らざるものと信するのである、彼の念佛門徒の説く様な厭世悲觀の思想は、現代に大禁物

である、假し巧みに之を胡魔化して現實と未來とを調和せんとしても、その根本教義が實生活の價値を重視しないのであるから、親鸞なり法然なりの立論を變更せざる限りは駄目である、又禪宗なども人生を茶化して住居も定めぬ雲水浮浪の生活を送るのが、悟りであるなどと無責任な言を云つて居るのは、人生の秩序や努力を蹂躪して顧みない流儀である、之は確かに生存欲の亢進を妨ぐる思想であるから採用すべきものではない、之等の誤れる信條に囚はれば、人生の不幸之に過ぎたるものはありません、斯様に現在に於て慰安も發展も得ることの出来ないものが、どうして未來に大果報を得ましようぞ、それだから善導の如きは、未來永久の光りを見出すことが出来ないで、空しく一命を柳の木に托して厭世自殺したと云ふてはないか、一宗の高僧とも謂はるゝ末路が何と云ふ見苦しい状態であらう、佛教の中心に信敬し來らなければ何れもさう云ふ結果に終るのである、そんな自殺的そのまゝの宗教信條は、人生の上存在を許すべきものでない、況

して狐や狸を佛教徒の手によりて祭るが如きは、實に亂暴と云つても沙汰の限りである、斯う人ふ事實は、決して佛教徒内部のみの問題でない、國家風教上の大問題であつて、深く之を研究して一齊に排斥の聲を擧げなければならぬと思ふ、およそ其國の思想状態が低級であるならば、従て文明の内容も貧弱なる譯である若し其儘に打捨て、敢て顧みないと云ふ事では、我國の文明成立の第一要件を缺いて居ると謂はねばなりません、危いのは我國の思想界の現状であります、どうしても焔々たる靈火を以て誤れる思想信條を燒き拂ひ健全なる思想の中心歸結を示すことが、人生國家の上に當面の緊急問題であると信する、曾て日蓮上人が、國と法とを思ふ大義名分の根礎に立つて、熱烈なる忠愛の精神を發揮せられたのも之が爲である、上人はこの問題を提げて思想運動を決定せられたのである、然るに當年の無能なる場吏や、自己の地位を維持するより外に頭の動かない僧徒等は、反て之を怨み之を讒訴して大迫害を加へたのである、而しながら、迫害は上

人の論道主張に何等の影響を與ふるものでない、勸持品二十行の偈は日蓮が爲に説かれたるものなりとの金剛の如き大自覺は、本化の大靈光を發射して人心の暗を照されたのであります、上人は佛敎の敎系より判定して法華經が中心歸結であることを徹底せられ給ふたのであります、其全身心が法華經と靈化の法華經自體を實行せられたのである、法華經は人生のあらゆる血管を網羅したるものであり、斯の理義を解明に開顯したるものである、而してこの開顯論が法華經の一大特長であつて佛敎の中心生命である、之は他の經典思想には見出すことが出来ないものである、法華經以外の敎には各個人の圓滿なる解決が缺けて居る、個人の尊とい意義を説いて居らぬ、而るに法華經は各個人の内に包に尊とい發展性を明かにして、無限向上を極論するのである、さうしてこの佛性の存在を自覺せしむるのが敎の力である、即ち佛性自覺の其處に大なる自利満足がある、斯かる自動的の満足を得ますれば、如何なる事柄に逢ふても奪はるゝ事はない、又之を捨て様と

しても捨てる事が出来ない、上人が龍の口の斷頭場裡に、臭き頭を捧げて金色の如來となるは沙を以て金に代ゆるが如しと仰せられたのも、大なる佛性の自覺があつたからである、と拜察する、この一種雄大なる力は豈に上人のみに限るものでありません、何人でも精神に永久不滅の光りを開拓して居りますれば、必ず崇高なる態度に表はるゝのである、吾々は何時死ぬか分らぬ、有限の生命は葉末に置く露の様な便りのないものであるから、人生の最後に於て何等畏るゝの念なく、從容自若として死に就くことが出来る様に心懸けねばならぬ、この意義深き人生に對して五十年の旅枕であると考へ、本能の欲望を充さんための方に動いて、自己佛性の開顯に意を用ひて居らぬものは、やがて斷末魔に煩悶に堪へぬことであらう、故に左様な嘆かはしい結果に陥らぬ様に個人の開顯に努むべき事を教ゆるものが法華經であります、されば此の法華經に啓導せられて個人の満足を得ることが出来ましたならば、更に進んで一般公衆を向上せしむる事を考へねばならぬ

即ち社會的開顯の人とならなければなりません、之を佛敎では菩薩行と云ふのである、菩薩行は公共的大精神を以て他の爲に努力するを云ふのであります、濁せる社會人生の廓正運動を指すのであります、即ち法華經には正法治國と説いてありまして、宗教的倫理的意義の政治である、それ故に健全なる國家及人生の發展は、政治家の策畫のみに委して置くものでなく、亦教育家のみの感化のみによりて成功し得るものでなく、人心を支配する宗教の權威に俟つ所甚だ大なるものがあるのである、宗教の感化を認めずして國運の進展を圖らんとするものあるは、あまりに無謀大膽なる態度であると信ずる、宗教は一機根に満足と與ふれば足れり團體との關係はなさまものなりと云ふが如きは、未だ佛敎の中心たる法華經の思想に進み來らぬものであります、日蓮上人は法と國との共存融化を絶叫して社會風敎の革新の爲に全努力を致されたのである、即ち謗法を禁斷して本門の大戒壇を樹立すべしとは、正しく社會的開顯であります、上人が鎌倉當年爲政者北

條を諫争したのも之が爲である、斯の如く日蓮上人の主張は理義明瞭である、何を苦しんでこの堂々たる論道に迷ふのであらうか、既に佛敎の中心は法華經である、法華經は吾人の開顯と社會の開顯とを説けるもの、この二大開顯の敎義こそあらゆる思想の中心歸結である、若し夫れ法華經の大思想に接して自己と社會とを開顯し、依て以てこの思想を發動せしめ、國家生民のために菩薩的貢獻を致す様に心懸けなければならぬと思ふ、斯くありてこそ始めて吾等生存の意義がある、永久に滅びざる我が發揮せらるゝのである、先づ須らく佛敎思想の中心を把住し、而して自己及社會の開顯的理義を明かにすることが、極めて重大なる緊急問題であると信じます。



養修

心

古定不新

凡そ人間一代の中に心程大切なものはないので御座います、故に古來心といふものは神王と申しまして、人間五體の王としてあります、さて此心といふものは時々刻々一刹那の間に移り變りて暫らくも止る時がないのである、是は無量無數億の煩惱といふものが心の中にあつて、時に生じ時に滅し、刻に起り刻に消えて一刹那の間にも種々の心が起るのである、今心の千變萬化する状態を説きますれば、心に物ある時は、心狭く身體胖ならず窮屈なり、心に物なき時は、心廣く身體胖なり、心に我慢ある時は愛敬を失ひ、心に我慢なき時は愛敬備る、心に慈なき時は義を思ふ、心に慈ある時は義を思はず、心に飾りある時は偽を思ふ、心に飾りなき時は偽なし、心に驕ある時は人を恨む、心に驕なき時は人を敬ふ、心に私ある時は人を疑ふ、心に私なき時は人を疑はず、心に誤ある時は人を恐る、心に誤なき時は人を恐るゝことなし、心に邪

修
心
古定不新
見ある時は人を傷ふ、心に直き時は人を傷はず、心に怒りある時は言葉はげし、心に怒りなき時は言葉柔和なり、心に貪りある時は人に誦ふ、心に貪りなき時は誦ふ心なし、心に勘忍なき時は物をぞこなふ、心に勘忍ある時は物をとくのふ、心に慈ある時は侮多し、心に慈なき時は侮なし、心に自慢ある時は人の善を知らず、心に自慢なき時は人の善を知る、是は心の裏と表とを明々地に顯たる格言であります。

凡そ人間の心には種々雑多の心が起りますが、之を譬へていひますと、海に風なき時は水天一碧と申して空の青さと水の青さが一となり、全く澄んで居りますが、一度風が吹けば波が浮立騒ぎ、大波小波が怒り狂ふ有様となると同様、無量無數億の煩惱の波が、澄んだ心王の海に無明の風に誘はれて起るのであります、其故に人間と生れた甲斐には、成るべく善き心を以て一生を貫くといふのが目的であると思ひます、故に悪心を去て善心に入り、邪心を去て正心に入り、小心を去て大心に入り、難心を去つて純心に入り、慢心を去

つて愛心に入り、不仁の心を去つて仁心に入り、不義の心を去つて義心に入り、不誠の心を去つて誠心に入り、愚心を去つて賢心に入り、散心を去つて定心に入り、迷心を去つて悟心に入り、不信を去つて信心に入る、斯の如くにして心の垢を去りまして、心王の光を顯すのが人として心得べき事で御座います、今一層進んで御話致しますれば佛陀が御説になりました御經の中には、菩薩の未だ發心せざる者をして菩提の心を發さしめ、慈仁無き者には慈心を起さしめ、殺戮を好む者には大悲の心を起さしめ、嫉妬を生ずる者には隨喜の心を起さしめ、愛著有る者には能捨の心を起さしめ、諸々の慳貪の者には布施の心を起さしめ、憍慢多き者には持戒の心を起さしめ、瞋恚盛なる者には忍辱の心を起さしめ、懈怠を生ずる者には精進の心を起さしめ、諸々の散亂の者には禪定の心を起さしめ、愚癡多き者には智慧の心を起さしめ、未だ彼を度する者と能はざる者には彼を度する心を起さしめ、十惡を行する者には十善の心を起さしめ、有爲を樂む者には無

爲の心を起さしめ、退心ある者には不退の心を作さしめ、有漏を爲す者には無漏の心を起さしめ、煩惱多き者には除滅の心を起さしめ、是は佛陀が佛道を信する者に、其汚穢五濁の心を去つて冷露明淨の心を保たねばならぬ事を、御教へになつた訓誡で御座います、さて斯の如き心を保つには如何なる行を爲し、如何なる法を信すべきやといふに、本門壽量の御本尊に對して身口意の三業に亘りて、法華經を色讀し、御題目を信じ唱ふるの外に道はない、斯て朝な夕な常に絶へず御題目を唱へ信心する人の心には菩提の心起り慈心起り大悲の心起り、隨喜の心起り、能捨の心起り、布施の心起り、持戒の心起り、忍辱の心起り、精進の心起り、禪定の心起り、智慧の心起り、彼を度するの心起り、十善の心起り、無爲の心起り、不退の心起り、除滅の心起り、無量無數億の煩惱は、御題目を信念口唱する信の心に消えて、其心は常に大慈の光明に包まれるのであります、げにも尊き御事なる哉。

神聖靈蹟

日經上人三百 遠年紀念序事

幕府の慘害と衆の憎嫉とによりて、久しく草莽蒙芥の中に抛擲せられ湮滅しいたる、日經上人の墓塋は愈々住職内藤日郎師の攻讖によりて、眞筮實墓なることを確證せられ、今回之れが三百遠年報恩の序事として、御墓塋修理併石柵建造等の作工事竣成したるを以て、三月二十六日開眼供養及竣成式を謹修せられたり、當日本覺寺日郎師の朗讀せられたる修文左の如し。

日經上人三百遠年紀念序の文

茲に、身讀法華宗門の大行日經上人の墓塋を理め、

石柵建造の作工竣り、本日恭く八方各更變二百萬億那由陀國皆清淨の儀式に則り、此土を莊嚴し、謹み畏みて、變土開眼の法樂を捧げ聊か三百遠年紀念序事を結構せんとす、仰願くば聖鑑悉照加被し玉はんことを抑も上人の歷傳に於て、生るゝにその處を知らず、學ぶにその師明かならず、終るにその地審かならず、といふもの必ずその原由の存するものなくんばあらず、止だ處なくして生れ、師なくして學び、地なくして終れりと云ふにはあらざる也。

大聖釋迦牟尼、尙生るゝに摩耶あり、學ぶに阿私仙

あり、終るに純陀のあるにあらざるや、而して今その終焉の一條に於て、専ら之れを討究するに、試に上人の一代を四期に分ち、愈不可解の因て來る所以を論じて自ら明むる所あらんとす、

- 一爲 生年より 初期 天正九年まで
- 二爲 天正十年より 初期 慶長十二年まで
- 三爲 慶長十三年より 中期 慶長十四年まで
- 四爲 慶長後より 後期 元和六年まで

上圖の二十二年間の序期は修養時代として暫く措き

初期は齡二十三歳の問答初陣より四十八歳まで二十五年間は、論戰連轉、向ふ處敵なく、戦へば必ず勝ち、攻れば必ず取り、法王の軍旗、獨り妙塔山頭に翻りて、獅子吼の勇悍雄々敷、將軍の聞達四回叡威不斜して、僧官大僧都法印に叙せられ、一代中最全盛得意の時代にありき、次で中期の齡四十九歳より五十歳に亘りて、對淨土、須の論端は、はしなくも遂に公場の問答となり、駿府御前の對談となり續ひて江戸城御前の對論と決し、孤軍奮闘味方は師弟但六人、明日は愈々出

陣の日、日蓮祖師の本懷を達すべし秋は今正に此の時なりと勇猛精進の法悦は、横難一夜の夢と化し、面覆の武士共數十人狼藉亂打の暴行は上人始め弟子五人をして九死一生の早死となし、翌日の公場問答は遂に一言も發すること能はざらしむるに至らしめぬ噫卑怯とやせん慘酷とやせん、彼等美濃尾張越後駿河遠江諸國の重もなる淨土寺の學匠達百數十人寄集まり其上幕府の權威を藉り用て、尙をも正々堂々陣を張ることをえずして卑怯の振舞慘酷の行動に出でしもの、寧ろ彼等の心中憐み且つ悲しまざるを得ざるものなしとせんや、疾く彼等は法華獨妙の大權に怖じ畏れ、日經一法將の義軍に到底打克つを得ざる自覺よりの用意に構へたるものなること明か也、家康公場に上人を引見して曰く、自今念佛無間の法門を止めよ、若し絶たざるに於ては重き罪科に處すべきの旨を以て強ゆ、然るに剛毅の上人は設ひ此の身を分斷寸裂せられ此の場の土と化せんも念佛無間の法門は法華經の理致、日蓮祖師の教條なること言明して憚らざりき、遂に斬首に科し後

滅して師弟六人俱に京都へ護送六條磔に於て耳鼻削殺の酷刑に處せらる、之れを一代中迫害慘悲の時代となす、遼莫、末代萬年特り上人の光彩を放てるもの、實に斯期の迫害留難故の玉ものたらずんばならず、上人の主義は此の時に於て遺憾なく發揮せられ、上人の色讀活釋は此の間に在て餘蘊なく實現せられたるもの也宜哉上人自ら曼荼羅に書して「叶經文之金言者也」と偉乎死せる法華經は上人を待て首めて蘇妙を得たり、佛勅使之の職命を果たせるもの夫れこの期間なる乎。

次で後期の滿十年間は迫害餘流の時代にして、内魔外敵、交々競起の難、殆んば前難に劣らぬ迫害追窮は終始身邊を離れず、内にしては教敵讒誣誣告息むことなく、爲めに數々見接出居所を追はるゝこと二十七個所、外にしては幕府國中に令して寸時も庇護抱介することを禁ぜしむ、其狀實に嚴なり密なり、故に寺を創しては自らを名乗ることを得ず信徒となり秘して竊かに之れを信するのみ、上總に在ては既に上人直建の芳墳寺は破却せられ、本滿寺圓立寺等の重なるもの

は燒拂はれ、弟子の日淨已下信徒六人は俱に斬首せられ、其外弟子信徒の追放、流刑に處せられたるもの其數幾百十を知らずといふ、當時の慘劇實に想像の外なりき、此の如き度を過ごせる迫害追窮は世上一般に、權威世憚の狀態となりぬ、これ此の時に當りて上人身上の一代に關しては公にもするを許さず、況んや之れを録書せんものをや、故に上人の始中終を詳にせずといふもの豈敢て怪むに足んや、その不可解となしたるものは、但當時實跡を湮蔽し、史考の材料を隠滅したるの一因に在るのみ、爾り而して三百年來の幾星霜、尙雲霧深ふして日光を見る能はざりしもの復止々之れが爲めのみ、上足五人の弟子、孫弟子日耀日淨等三十餘人の終はる所ろ審かならざるもの、皆此の一事に過ぎざるなり、惟ふに幕府、地頭の迫害追窮は、上人則明の當時よりも、餘流時代に於て増々甚だしきを見、餘流在世の時代よりは、滅後四十年間程は加て劇しかりしを覺ゆ、是れと共に權威世憚の觀念は一層恐怖心となり、事跡實錄の湮滅亦湮滅と世々傳へ重なる

りて、遂に終に其の實證眞據を探ぐるに由なきに及ぶ惜みても尙餘りある哉。

然るに暗熾は念々暗流を滔み、迷宮は熾々假城を造りて、上人の終焉するところ或は神通川の邊りといひ或は佐渡或は越後と杜撰臆説、殆ど一として把握するところなし、其の近を忘れて遠きを求め、現有を離れて空想を計はんとする如きは曲學僞考の儻にあらずんば、捨兎守杭の痴輩のみ。

近く見ずや、上人の全身は今尙嚴然未散として本覺の精舎に眞影在すことを、親子識らずや、上人の白血は今尙本門山頭五輪不散の墳塔に印するものを、當に知れ、最後臨滅度時の道場、眞筮實墓の靈蹟は、閩門五百寺中、金城西南の一隅、六斗林彬彬として風清處唯一本門山本覺寺是れなる事を。

今後、上人を語んとするもの、上人の墓前に拜跪し過去幾年來の非禮を懺謝し、而して徐ろに上人をものすべきなり、宗門は何等の形式によりて過罪懺法の式を行ふて宜也乎、今や三四年を越へずして、上人の三

百遠年祥當忌を迎えんとするの期前にあたり、眞筮實墓の修理を施し、周圍に石欄を建造し、花筒一對、燈明一對を備へ、草莽榮芥を芟除して不淨地を拂ひ、赤土を盛替へて栗砂を敷き、樹木栽して其の體を作し、三磨を鳴らして法雨を灑ぎ、以て聊か三百遠年の先序を事る、光榮焉んぞ勝へん。

替首日經上人、悉照哀愍納受し玉はんことを

拜跪、禮足

大正四年三月二十六日

顯本法華宗 末弟

本門山本覺寺廿四世本淳院日郎

自己を知るものは自己なり、而して自己の實力信行はいかに、あゝ、信力試験に登第するもの幾人かある。

大法鼓の響

東京

- 三月八日下谷上根岸町根岸堂に光明會講演開演
- 人々が爲めに生けるや 柳生 正生
- 努力の根底 關田 日域
- ▲十三日午後七時淺草新谷町壽仙院講演開演
信仰と家庭 三上 義徹
- ▲十四日淺草統一閣に開演
日蓮主義とは何ぞや 高木 本順
- 宗教意識に就て 石川 顯隆
- ▲十五日午後七時小石川白山會講演開演
自己信力の試験 本多 日生
- ▲廿一日午後淺草統一閣講演
心理的奇蹟 三上 義徹
- 日蓮主義の煩悶觀 水野 乾心
- 法華經の妙致 野口 日主
- ▲廿七日午後七時淺草統一閣に青年團講演
學生と信仰 本多 日生
- 自我實現 富元 會榮
- 山の信誼 山本 信誼
- 生の價値 牧田 英明
- 此一因を禁ぜよ 草切 信榮
- 日蓮主義の理想 國分 顯有
- ▲廿八日午後一時淺草統一閣講演
定業亦能轉 江見 乾丈
- 信仰と研究 關分 顯有
- 井村 日成

静岡縣

- 三月二日濱名郡太田妙安寺に於て古定實正師は晉山式を執行したり會するもの西山日蓮白井日慶清水純榮野中通玄藤本智安高橋道順田久保日城猪野貞立長榮寺東雲寺の諸師を始めとして知波田村々會議員各名譽職を始め權家一同にして古定師は慶讃文を朗讀權家總代豐田六平祝詞を讀み田久保日城師の祝詞演説あり
- ▲二月廿五日後八時田原町當行寺に演説開演
- ▲日蓮主義より見たる經濟 田久保日城
- ▲廿六日田原町六連酒井菊次宅に講演會開演農村と時間經濟 田久保日城
- ▲三月十九日名古屋市靈山寺に彼摩法要及講演開演

京都

- 三月一日午後一時妙滿寺に國藏會を行ふ
- 日蓮主義の修養 銀井 乾舟
- 正しき信仰は唯一也 萩原 啓門
- ▲同夜或就院に護正會を開く 川崎 英照
- ▲六日妙滿寺に學生日蓮研究會を開く 川崎 英照
- 法華經大意續講 萩原 啓門
- ▲九日午後一時正行院に正行婦人會開演 川崎 英照
- 色心の信仰 川崎 英照
- ▲十日夜或就院に護正會の例會を開き 川崎 英照
- 觀音賢經大意 川崎 英照
- ▲十三日妙滿寺に宗祖報恩會を奉修す 萩原 啓門
- 投機的信仰を排せよ 三好 信道
- ▲十五日千本壽量寺に講演開演 萩原 啓門
- 信仰の要義 萩原 啓門
- ▲十六日法光院に妙光婦人會を催す 萩原 啓門
- 名は體を顯はす 萩原 啓門
- ▲十七日午後一時或就院に婦人會を開く 川崎 英照
- 現代婦人と信仰 川崎 英照
- ▲十八日夜妙滿寺に講演開演 石先 寛俊
- 我が人生觀 川崎 英照
- 我國の佛教 萩原 啓門
- ▲十九日妙滿寺に彼摩法要及講演を行ふ 萩原 啓門

大和

- 一念信成佛 萩原 啓門
- ▲廿一日彼岸中日法要説教を行ふ 萩原 啓門
- ▲廿三日京都府下木津町妙樂寺に講演開演 金光 孝碩
- ▲廿四日川東町寂光寺に彼摩會を開く 川崎 英照
- ▲廿四日日本正寺に彼摩會を開く 金光 孝碩
- ▲廿五日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲廿六日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲廿七日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲廿八日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲廿九日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲三十日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲三十一日彼岸結日説教執行 金光 孝碩
- ▲三月二十三日郡山町常光寺に天晴會發會式を挙げ講演を開演す 笠目善次郎
- ▲三月十二日夜生玉寺町堂開寺に講演開演 京藤 義應
- ▲三月十三日夜四高津中寺町蓮成寺に開演 堀本 日種
- ▲三月十四日夜四高津中寺町蓮成寺に開演 京藤 義應
- ▲三月十五日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月十六日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月十七日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月十八日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月十九日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十一日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十二日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十三日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十四日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十五日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十六日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十七日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十八日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月二十九日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月三十日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門
- ▲三月三十一日午後一時蓮成寺彼摩會修行 萩原 啓門

廣島

- 富國強兵 岩槻農學士
- ▲十五日日本成寺婦人會講演 原田 日勇
- ▲十六日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲十七日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲十八日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲十九日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲二十日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿一日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿二日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿三日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿四日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿五日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿六日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿七日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿八日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲廿九日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲三十日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲三十一日日本成寺同信會講演 原田 日勇
- ▲三月十二日吳説教所に於て講演開演 原田 日勇
- ▲三月十三日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月十四日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月十五日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月十六日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月十七日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月十八日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月十九日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十一日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十二日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十三日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十四日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十五日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十六日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十七日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十八日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月二十九日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月三十日新川場本照寺に講演 大橋 日毅
- ▲三月三十一日新川場本照寺に講演 大橋 日毅

福岡

- ▲廿二日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿三日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿四日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿五日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿六日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿七日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿八日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲廿九日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲三十日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲三十一日同寺に於て彼摩會説教修行 島田 顯恕
- ▲三月七日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月八日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月九日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十一日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十二日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十三日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十四日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十五日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十六日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十七日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十八日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月十九日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十一日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十二日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十三日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十四日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十五日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十六日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十七日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十八日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月二十九日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月三十日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅
- ▲三月三十一日三池郡銀水村上龜崎青年會講演 大橋 日毅

岡山

- ▲三月五日和氣町木庄學校に郡農會の講演あり 秦 縣技師

- ▲精神修養と青年 出海 俊義
- ▲十六日三池郡二川村後田西山寅藏宅講演 日蓮主義 出海 俊義
- ▲十八日午後七時久留米市大月梅太郎氏宅に講演 意義ある信仰 平岡 本信
- ▲法を知て國を思ふ 中原 通應
- ▲十九日渡瀬新興寺に講演 是名持戒 出海 俊義
- ▲十九日午後三時神川町妙經寺に講演 本佛と信心 吉見 法榮
- ▲來世の有無 平岡 本信
- ▲一心欲見佛 中原 通應
- ▲二十日銀水村倉永一心團發會式を小學校講堂に開催 第三帝國と一心團員 出海 俊義
- ▲二十一日午後三時水泰寺に講演 開法の功德 平岡 本信
- ▲信仰と道德 吉見 法榮
- ▲實在を信ぜよ 中原 通應
- ▲二十二日渡瀬新興寺に彼摩法要説教 無常觀と實在 出海 俊義
- ▲二十五日午後三時水義寺に講演 發菩提心 平岡 本信
- ▲顯本と統一 中原 通應
- ▲二十五日渡瀬新興寺に彼摩説教 難信難解としての法華經 出海 俊義
- ▲二十七日午後二時久留米市辻忠八氏宅講演 演信念成佛 平岡 本信
- ▲國と法と我 中原 通應
- ▲二十七日二川村東邊青年會同志會大會講演 到於彼岸 高貫 見龍
- ▲廿三日同村丹尾清宮氏宅に婦人會の春季大會を開き講演開催 會を開き講演開催 高貫 見龍
- ▲廿四日茂原町山崎妙行寺に説教開催 婦人と信仰 高貫 見龍
- ▲廿四日茂原町山崎妙行寺に説教開催 彼岸と吾人の心得 竹内 顯領
- ▲廿四日新治村大澤法命會春期大會を舉行す 開會の辭 法命會世話人
- ▲實在觀 富田 林惠
- ▲閉會の辭 島本 順祐
- ▲廿五日小巻蓮成寺に説教開催 彼岸と菩提の意義 山田 誠心
- ▲廿五日長尾寶泉寺に説教開催 開會の辭 角川 泰碩
- ▲誠の心は萬事に必要なる事 竹内 顯領
- ▲廿五日千葉郡白井村中野本城寺に講演 得益談 日暮 玄靜
- ▲廿八日大綱町永田光昌寺に於て本多大僧正の講演ありたり 國民道德の現底 本多大僧正
- ▲廿九日午後東町教育會に講演 廿一日午後一時福岡村小沼田要本寺に講演 六波羅密自然在前 長 美明
- ▲心 倉上 晴榮
- ▲三大秘法 土屋 眞容

演開催

- ▲國家と個人の自覺 高海 俊義
- ▲三月十六日夜妙經寺に福井地明會 福井 開催
- ▲淳善なる信仰 増田 聖道
- ▲十九日廿二日廿五日の三回に互り妙經寺に於て彼岸會を修し増田氏は菩薩行及び智目行に付き聽聞者の心田を潤せり
- ▲三月十九日午後一時市内本行寺に於て法要並に講演を開催 金澤 成島 隆康
- ▲佛陀の本懐 日蓮主義修養に就て 金光 孝碩
- ▲二十五日市内本長寺に彼岸會法要講演 活ける信仰 星 照玄
- ▲盛岡 三月二十七日午後二時盛岡地明會の主催にて縣立物産館階上に精神講話あり
- ▲法定國清の意義 笹川 日堂
- ▲宗教根本の精神 笹川 日堂
- ▲廿八日法華寺に日什大正師の報恩會を舉行 日蓮主義と其信仰の歸向 笹川 日堂
- ▲宇都宮 四月四日午後一時商業會議所に於て大講演會を開催せり
- ▲開會の辭 夢倉 幹事
- ▲日蓮主義より見たる歐洲の大動亂 柴田 一能
- ▲講演後六時より妙正寺書院にて講師の慰勞旁有志懇親の晚餐會を開く席上柴田師は統合團體及近く來朝すべき東洋思想家ターニョル氏の來遊所見談あり續て野口大尉は陣中に於ける信仰懇話ありて修養上有益なる會合にてあり

りき

- ▲千葉縣 三月一日山武郡丘山村丹尾東成寺に寺禮懇話會を開く 生存の意義 高貫 見龍
- ▲二日午後七時同寺に講演 信仰の意義 高貫 見龍
- ▲三日長生郡豐田村北塚區吉井林藏方に幻燈會を開催し山田誠心吉井光剛氏の説明あり
- ▲五日山武郡海村西野區福富岡吉氏方に共和婦人會を開催せり
- ▲開會の辭 鈴木 日五
- ▲人の母 鈴木 正二
- ▲糖徳の修養 鷲崎 日憲
- ▲貞節の危機 土屋 眞容
- ▲九日茂原町道路布教を開催し山田誠心竹内顯領兩師の獅子吼ありたり
- ▲十二日押日來光寺にて講演開催 生死一大事血脈抄に就て 山田 誠心
- ▲十七日東金町大豆谷寺にて報恩會を發行 開會の辭 渡邊 玄雅
- ▲四恩報答 高貫 見龍
- ▲十九日茂原庄吉福庄寺に講演開催 彼岸の意義に就て 山田 誠心
- ▲彼岸と修養 秋山 乾英
- ▲廿日山根區道臨寺に彼岸會説教 彼岸と信仰の心得 山田 誠心
- ▲廿一日午後七時山武郡南橋川三光寺に開講 慈悲海上の法の舟 小竹 俊雄
- ▲廿二日午後二時大綱在南富田福田寺に開講 現一切色心三昧 小竹 俊雄
- ▲廿二日午後七時南橋川青年會に講演

- ▲斷惑證理 小竹 俊雄
- ▲廿二日押日來光寺にて彼岸説教 彼岸とは何の意義か 山田 誠心
- ▲廿二日福岡村小沼田要本寺に開講 如説の修行 土屋 眞容
- ▲廿二日丘山村東成寺に彼岸法要 到於彼岸 高貫 見龍
- ▲廿三日同村丹尾清宮氏宅に婦人會の春季大會を開き講演開催 會を開き講演開催 高貫 見龍
- ▲廿四日茂原町山崎妙行寺に説教開催 婦人と信仰 高貫 見龍
- ▲廿四日茂原町山崎妙行寺に説教開催 彼岸と吾人の心得 竹内 顯領
- ▲廿四日新治村大澤法命會春期大會を舉行す 開會の辭 法命會世話人
- ▲實在觀 富田 林惠
- ▲閉會の辭 島本 順祐
- ▲廿五日小巻蓮成寺に説教開催 彼岸と菩提の意義 山田 誠心
- ▲廿五日長尾寶泉寺に説教開催 開會の辭 角川 泰碩
- ▲誠の心は萬事に必要なる事 竹内 顯領
- ▲廿五日千葉郡白井村中野本城寺に講演 得益談 日暮 玄靜
- ▲廿八日大綱町永田光昌寺に於て本多大僧正の講演ありたり 國民道德の現底 本多大僧正
- ▲廿九日午後東町教育會に講演 廿一日午後一時福岡村小沼田要本寺に講演 六波羅密自然在前 長 美明
- ▲心 倉上 晴榮
- ▲三大秘法 土屋 眞容

◀ 讀者に告す ▶

- ▲四月二日午前十時清名寺谷東光寺教護會に於ける出獄者の懺悔式を擧ぐ 磯海清淨の大精神に就て 小竹 俊雄
- ▲三日午後一時増穂村小學校内教護會感化

- ▲講演及編輯を開催せり 開會の辭 小竹 俊雄
- ▲法の權威 篠崎安五郎
- ▲感化 成島 泰行

△『統一』の購讀料金御拂込方に就て再度申

入候へしも何等御回答無之御方も有之整理及經營上にも支障相生じ候故是非共
 四月中に御拂込相煩度

一、本誌料は何卒前金に御拂込方願入候
 一、料金二ヶ年以上の御方へは數回手紙にて御都合相伺候も未だ御沙汰無之近頃迷惑致居候依て四月中御拂込無之候時は五月より發送見合せ候間豫め御承知置被下度候



脳胃の能醫

NO.1 is No.1

腦と胃は極めて重要な關係を有す然るに腦神經を鎮靜する藥物は概ね胃腸の機能を害し姑息的たるを免れず本劑は腦神經藥たると同時に消化器を健全ならしむる作用を有す故に理想的の好結果を得べき事を確信す

主治
効能

神經衰弱 ● ヒステリー ● 不眠症 ● 腦痛 ● 頭痛 ● 惡夢 ● 胃加答兒 ● 胃弱 ● 消化不良

● 藥價三日分金參拾錢 ● 五日分金五拾錢
本誌讀者に限り約三十%の割引特權あり
希望者はハガキにて申込を乞ふ

▼ノールキはイキ藥▲

東京市下谷區上根岸町百十一番

金澤山石堂

電話下谷二二五九番

日宗教團法衣專門

◎虔告◎

◎上總布田藥王寺にて奉修の大
法會には二十六七日の兩日特
に店員出張致居候間何卒御用
命仰せ付被下候様相願上候

◎法衣、五條、七條、燕尾、差貫、並
に當時尤も流行の改良布教服、
略五條、せる袴等の現品取揃
持參可致候

◎從來御着用の法衣染色は入
念御用命に應じ可申候

東京淺草三好町二番地

草木伊助出張店

(振替口座東京二四五六八番)

日宗法衣専門

青雲帽 希教服 袴

此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条

飯田法衣店

振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さざる自然の特徴を有し候
小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御満足迄誠意見本を提供し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價

▲一部郵税共金六錢五厘○半年分金參拾九錢一ヶ年金七拾八錢。新購讀者は前金拂込されば發送せず

廣告料

表紙うら。うら表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事

雜誌及廣告料金拂込

東京小石川白山前町十七番地三上義徽報社
上表敬報社口座東京二八八四〇番へ拂込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込及編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候

▲讀者の特權——本誌讀者にして日蓮主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字誌に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし(但し採否は編者の權内とす)

大正四年四月十五日印刷發行

發行兼編輯人 東京市小石川區白山前町十七番地 三上 義徽
印刷人 鈴木 日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 一團
編輯所 東京市小石川區白山前町十七番地

▲思想の界の教書▲

◎法華經講義
 本多日生師著
 洋裝二千頁定價金四圓なるも特價金參圓と郵
 稅十六錢を以て提供す

◎如來壽量品講演輯
 本多日生師講義
 壽量品の大意を知らざれば一代佛
 教の中心を知らざるもの也佛敎の
 活力眞價は壽量品にあり讀め大
 に讀み佛陀の眞精神に接觸せよ

◎精神の修養——思想の調整
 軍事教育會發行
 内容豊富立論堂
 々近代の快文字
 なり

◎軍神加藤清正公
 陸軍少將 小原正恒著
 清正公の人格及宗教的信仰を知ら
 んとするものは先づ本書を讀まざ
 る可らず施本用に尤も適せり

◎立正安國論略解
 マスター、エグ、アツツ柴田一能著
 第一版已に賣切れ再版出來△日蓮主
 義と國家との甚深なる交渉を知らん
 するものは須らく本書を讀むべし本
 書は通俗的に能く之を理解せしむ抽
 珍美本にして百十頁の内容あり

◎縮法華經並開結
 菊判半截携帶に尤も便
 紙製二十錢 郵稅二錢
 布製天金四十五錢 郵稅六錢

◎橘香集
 日蓮上人の遺文拔萃にして研究順
 序の指南あり

◎勤行作法
 信仰者が朝夕の修行は嚴正にして
 謬りなきを要す本書は日蓮門下を
 通じて齊しく奉行すべき作法を示
 したる教典也

日蓮主義の將來

本多日生

現在の印度

木村龍寛

正義の實と迫害

三上義徹

朝鮮宗教視察談

朝倉俊達

統一

號三十四百二第

號月五

日本の柱

清水梁山

所賣販 東小石川山前町七十番地 三上義徹
 [番〇四八八二京東替換]